応答表現とゼミ発表の推進の関係について

-日本大学の「ゼミ」における談話分析-

S17（カナ表記）
S17（漢字表記）
学籍番号

Ⅰはじめに

近年、日本にゼミ（ゼミナールの略称）という高等教育において行われた授業科目が注目されている。ゼミは担当教員のご指導のもとで、少数の学生がある特定なテーマに関する討論、検討、研究などを行う教育方法としており、留学生教育に用いることもある。しかし、留学生を対象としてのゼミもう設けたが、実は、留学生の大多数にとっては日本語の語力が中級または上級であっても、ゼミの内容を十分に理解するのが非常に困難である。したがって、ゼミを最大限に留学生教育に利用するために、学部生と大学院生に向けるゼミの行い方を分析し、分析の結果から抜粋した点を留学生教育に用いり、その教育方法を改善することは今グロバーリズムの背景での高等教育に非常に重要なことと思っている。

大学ゼミの行い方への研究においてそれぞれの分野がある。ゼミ発表の質疑応答にある応答表現は自然的な表現であり、なければならないとわかるが、ゼミ発表の順調に進むことに対してどんな作用があるのだろうか。

そこで、本稿では大学院のゼミの談話を分析し、特に応答表現という点について、発表者が自分の応答表現と発表の連続性の関係について議論したいと思う。

Ⅱ先行研究と本研究の位置づけ

大学院のゼミの談話において応答表現について、前に多くの研究が出てきた。
一般的には、質問者が応答者より会話への主導性があり、応答者は聞かれた質問や意見などできるだけ応答する以外何もできなく、対話構造に力になれないという見方がある。しかし、会話は両方が話し合い、質問者が応答者とともに協力して対話を構造し、つまり両方も対話を主導することができることが多い。堀口（1997）は、会話における聞き手の役割を分類し、示している。そこでは、「会話において、聞き手は、話し手と同じように重要な役割をになっているのであり、その役割は話し手が会話において果たす役割と同等に評価されべきである」と述べている。特にゼミで発表をする際、発表担当者は多くの時間に応答者つまり聞き手としており、質問者からの質問を回答しながら、発表を推進することがよくみられる。この点について、吉田（2009）次のような指摘をしている。

応答者による応答内容の選択によって、質問表現が使用された会話が構造的に促進する（維持される）という現象をとらえることができ、質問表現を分析する上で、応答者の発話の重要性を指摘することができる。

また、質問者と応答者が同じ情報をシェアする場合、応答者は質問者からの多義性を持つ質問を受け、後続する会話構造に工夫することができて、発話連鎖の飛躍がもたらされる。これに関し吉田（2009）は、「発話の連鎖に飛躍がある現象は、共通の経験や知識が多い親しい間柄の会話に特徴的であると考えられるが、連鎖が飛躍したり、指示対象が推移しながら会話が進行することで、より内容が先取られた展開の速い会話へと繋がると考えられる」と述べている。

しかしながら、筆者は発話の連鎖に飛躍がある現象は親しい間柄の会話の特徴だけでなく、話し手と聞き手が共通の情報がシェアすれば、そういう飛躍が現れると思う。ゼミで発表するとき、前に配られた資料と講義を共通の情報とし、発表担当者は質問を聞き、質

問がまだ終わらない際に相手のわからない点を推測して相手の話を接続して応答することができる。発表者の応答はその飛躍を保障することである。平本毅（2011）によると、相手を理解したことに基づいて、自分の見解や態度を提示するためには基本形式が一つある。その基本形式は次のとおりである。

［①「私事語り」→　②「わかる」を含む文（①への理解の〈主張〉）→　③①への理解の〈立証〉の試み（であると同時に②の「理由の説明」）→　④①の語り手による、③への〈受け入れ〉］。

実際にゼミ発表の場合は、こういう形式をよく見られる。一般的には、この形式の②③④は聞き手あるいは発表者の応答という形で表現する。その状況で、発表する途中に出てくるその応答は聞き手が自分の質問が理解されると感じることを保障するにとどまらず、その結果、質問者が自分の質問への説明にかかる時間が少なくなり、発表の全体的に発表を推進することもできるだろう。

Ⅲ研究の資料と分析の方法

まず会話資料としてのは、某ゼミナールにおける日本語学習者を対象として、日本語でレポートを書くことについての調査の分析方法への質疑応答である。

01S：例えばですけど、T 検定だと、この二つのグループを比べるのには 100 名ですと、ま、50 とか、60、40 という風に、まあ、
02A：男性と女性とか。
03S：そうですね。ある程度結果は出やすいと思うんですけど、分散分析だと、3 グループ 4 グループ。

上記の会話資料では、質問者 S がどうしてグループを分けるいいのかについて自分の意見を申し上げ、発表者 A と話し合っている。01S で、S は毎グループにふさわしい人数について自分の考えを述べている。そのあと、02A では A が S の意思を推測し、「そうですね」という風に応答しなく、さらに進めてほかの分類標準を提出し、会話を進めていることは明らかなことである。03S のところで、S は「そうですね」と答えたあと、ほかの内容に逸脱してしまった。その理由は、S は自分の話したいことを A が十分に把握したことがわかるからだ。このように、順調に会話が進められるに至ることがわかる。

会話 2 は学習者の絵本多読について質問者 N と発表者 R が話している。
01N : はい、話が簡単な法に戻るんですが。インタビュー、学習者としてのインタビュー、韓国語を学習している方にも、
02R：したんです、はい。
03N：ですね。それも論文には生かしていく。たとえば、いかすとすると。
04R：はい、生かしていきたくて。て言うのは、その一、韓国語をしている人たちは全員自分がいやっている会のメンバーなんですけど、絵本だけ読んでいるんですね。それで、、、（後略）

会話 2 の下線の部分を見てみよう。N の発話まだ終わらなく、R は相手の聞きたい点が正確に理解し、「したんです」と「生かしていきたくて」で接続して応答する。R は「わかる」という意味を自分の応答表現に反映し、十分に聞き手に伝えることができる。こうして、対話の連続性が強くなり、順調に発表を進めることは保証される。

Ⅳ分析の結果

今までの予備調査からまとめてみると、以下の三つの点になる。まず、両方が同じ情報をシェアする場合、単に話し手だけではなく、聞き手も対話の進めを控えることができる。次、ゼミナールにおける発表を研究対象として、メンバーが参加する質疑応答の部分では発表者が聞き手の役割を担い、自分の応答表現を控えることを通して質疑応答の進めを左右することが多いとわかる。最後に、発表者は質問者の質問を自分で推測して、質問がまだ済まないところで相手の話を接続して答えることで、対話がうまく進むことを保障する。

Ⅴ参考資料

吉田睦（2009）「会話内の質問表現が持つ多義性　－応答表現から見る会話構築を中心に－」『つくば応用言語学研究』16 号　pp. 87-97
平本毅（2011）「他者を『わかる』やり方にかんする会話分析的研究」『社会学評論』62 号　pp. 153-171
堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお　p. 157